

核データニュース通巻 100 号記念

船頭多くして

中嶋 龍三

核データ・ニュースは、シグマ委員会が設置されてちょうど3年経った1966年3月に「JNDC ニュース」として創刊されて以来、今年はこの号が100号になるそうである。その間に名称や内容、体裁に若干の改良・変更はあったものの、三分の一世紀にわたって核データ・コミュニティーの情報、意見等を交換するよき場であったと同時に、シグマ委員会の活動を学会や産業界の人々に宣伝する役割を十分に果たしてきたことは、まことに顕著な業績であるといえよう。

周知のようにシグマ委員会は、原子力研究・開発の基礎分野の一つである中性子断面積データの整備（収集・評価）を目的として、広い分野からの有志が集まって結成されていた。当時先行していた欧米の核データ活動の後追いという気持ちが委員一人一人の中に無かったとは言えない。したがって、中性子断面積データの整備をどういう体制でどのように進めていくかという議論が数年間にわたって活発に続けられた。実は私は、少し前に核構造データの評価を行っていたアメリカの核データ・グループから戻っていたのでシグマ委員会の委員に加えられ、しかもずっと後になった今、この「核データニュース」第100号に、核データ評価に関する評論を寄稿せよという要請を編集委員から受けた。しかしながら全く私的なある理由によってこの要請を引き受けることができず、替わりに以下のような雑文で勘弁してもらおうことにする。

上に述べたように、シグマ委員会の草創期には中性子断面積データだけを扱うのだといっても、勉強したり作業したりまた互いに議論したりしなければならないことが多かったので非常に忙しい時期だった。そのうち、マン・パワーの不足をほやく声が聞こえてきた。そのほやきは徐々に蔓延していった。その頃ある人が、「まさに『船頭多くして船山に上る』だね」と笑顔で話したことを思い出す。彼は悪意をもってこう言ったのではないと私は信じている。中性子データの収集・評価に携わっている委員会メンバーは多士済々で、それぞれ個性の強い独自の能力を発揮している船頭だからなかなか纏まりにくいのだと、彼は言っていたのかもしれない。しかし私は彼の言葉にさらに余計な自分勝手な解釈を付け加えて、船頭が多ければあっちの山にもこっちの山にも行ける。つまり多岐にわたって仕事が進展すると考えたらいいのではないかと思ったことだった。

こんな解釈をしたのには訳がある。私がアメリカで核構造データの評価をしていたと

きの核データ・グループのボスは、K. Way という女性である。岩波書店刊の一般力学の著者で回転群の大家でもある山内恭彦先生は、「僕がアメリカに行ったときに、僕にもよく分かる英語でとても親切に喋ってくれたのはエンパイア・ステート・ビルディングの案内人と Way 女史だけでした」と言って出発前の私を励まして下さった。核構造データの評価を行うにあたっては Way 女史は非常に厳しいのだが、しかし評価法に関しては評価者がある定まった型にはめるようなことはしなかった。最終的なゴールは共通なのだが、そこに至る過程は研究者一人一人が独自の道を選んだらよい。ただそれが間違っていないということについては事前に十分に議論しなければならない、と彼女は言う。したがって彼女の率いる核データ・グループでは、評価者それぞれが一人前の船頭で勝手な評価研究を行っているように見えるが、最終的には個人個人による味わいは異なるものの本質的には正しい結果を得ることになる。こんな船頭の集団があってもいいのではなかろうか、と私は考えたのだった。

ところが、辞書を見ると私が考えていた以上に悪い意味だけしか見当たらない。しかもこの諺は英語で **Too many cooks spoil the broth** というそうで、あまい私のこじつけ解釈の入り込む余地が全然ない。しかし、ここでもう少し横車を押してみよう。

シグマ委員会設立の初めのころは中性子断面積データの収集・評価からスタートしたのであるが、それでも取り組まなければならない作業は沢山あったので克服しなければならない峰はいくつもあった。あれから 10 年経ち、20 年経ち、30 年経つと、当然のことながらシグマ委員会の評価対象は時勢の要求に対応して高エネルギー核データ、荷電粒子核データ、燃料サイクル核データ等々と増加してきた。それら多岐にわたる核データの評価にあたっては、従来の経験を生かし蓄積された能力を発揮すればそれぞれの山頂に立つことが可能であろうが、しかし、時には何人かの船頭が協力して目的を達成することも要求されるのではなかろうか。

例えば「犬も歩けば棒にあたる」という諺には、棒に当たって痛い目にあうという悪い意味だけでなく、予想外のよい拾い物をするという都合のよい意味もある。それだから、「船頭多くして船山に上る」も核データ評価の分野に限っては、辞書などに載っているような“失敗する”だけではなく、多くの船頭が協力しあえばより効果的にいくつもの高い山頂に立つことが期待できよう、と考えたらどうだろうか。